

## ヨハネ1章9～13節「神の子どもとなる特権を」

人となってお生まれになった神の御子イエス・キリストのすばらしさを、みことばから教えられたいと思います。1章の冒頭で語られている「ことば」なる方、光であるキリストについて、ヨハネは続けて語ります。

### 1. まことの光（：9）

9節。すべての人を照らす光、世に来ようとしていた光、キリストのことを、ここでは「まことの光」と呼んでいます。「まことの」にはどのような意味があるでしょうか。

荒野の40年の間に与えられたマナと対比して、ご自身を信じる者は決して飢えることがなく、永遠のいのちに生きると約束されました。そのような「まことのパン」であると言われました。また、神はぶどうの木を植え、ぶどう畑を整えて、甘いぶどうがなるのを待ち望んでいたが、すっぱいぶどうができてしまったと言われました（イザヤ5章）。それに対比して、人が主イエスにとどまっているなら、多くの実を結び、神に喜ばれる実を結ぶことができると教えました。ご自身こそ「まことのぶどうの木」であると言われました。

同じように「まことの光」も、対比を意識し、救いに関して表現していることばであると考えられます。「闇の中を歩んでいた民は 大きな光を見る 死の陰の地に住んでいた者たちの上に 光が輝く」（イザヤ9：2）と預言されていたその「光」を、ユダヤ人たちは待ち望んでいました。イエスより先に活動していたバプテスマのヨハネについて、人々は彼がその「光」ではないかと思いましたが、彼は「光」ではなく、「ただ光について証しするために」神から遣わされた人でした。そうして、預言され、待ち望まれた「光」であるお方が、ついに世に来られた、イエスこそ「まことの光」であると言います。この方こそ、闇の中に輝いて、人々を照らすことができる光であり、人々に救いを与える本当の救い主キリストであると、使徒ヨハネは言うのです。

その「まことの光」であるイエス・キリストは「すべての人を照ら」します。太陽がすべての人を照らすように、イエス・キリストはすべての人を照らし、恵みを与えてくださいます。神の一般恩寵によって、すべての人は生きていられます。自然界から与えられる恩恵、人々の努力の結果として与えられる恩恵によって人は生きていられます。でも、それらは人の罪によって歪められ、悪用されることもあります。

そのような一般恩寵だけでなく、神は特別の恵みを与えてくださいます。主イエスによって光を照らされ、主イエスを信じる人は誰でも、救いを与えられます。人の罪によって影響を受けることはなく、むしろ人を罪から解放する完全な救いです。そのような主イエスによる救いを与えられる特別の恵みがあります。その恵みも、すべての人に差し出されています。

そのまことの光が「世に来ようとして」いました。神の御子であるお方が、人となって生まれようとしていた、救い主として人々の前に現れようとしていたと言います。

### 2. 世の態度（：10～11）

10節。父なる神とともに「ことば」なる方がおられ、創造の御業をなさり、この世界を支配し、保っておられます。自然界や歴史の背後に神の御業があり、時には超自然的な神の御業がなされます。そのことをみことばに基づいて信仰によって見ることはできるはずですが、けれども、「世はこの方を知らなかった」のです。

「神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです」（ローマ1：19～21）。人は神を知っているはずだ、はっきりと認められるので弁解の余地がない、と言っています。けれども、それを認めようとしない人々が多いのです。

11節。神はイスラエルを選び、契約を結び、ご自身の民として導かれました。御業を行い、律法を与え、また預言者たちによってお語りになり、ご自身を特別に啓示されました。そして、イスラエルは幕屋での礼拝において様々な型や予表としてキリストを見ることができました。あるいはモーセやダビデやエリヤによって、キリストがどのような働きをなさるかを知ることができました。そして、ユダヤ人たちはそのキリストを待ち

望んでいました。ところが、キリストが実際に来られたのに、「ご自分の民」はこの方を受け入れませんでした。ユダヤ人の多くの者はつまずきました。

今も、天地万物を創造し、支配しておられる永遠の神を、神として認めず、イエス・キリストを永遠の神の御子、救い主として受け入れない人が多くいます。そのことを聖書は罪と言います。人の罪のゆえに、偶像礼拝と様々な悪が行われ、争いが起こっています。闇がこの世を覆っています。神を神としてあがめず、キリスト・イエスを受け入れないなら、人の罪とこの世の闇は解決されることはありません。

### 3. 救いのみわざ（：12～13）

しかし、キリストを受け入れるなら解決が与えられます。12 節。旧約聖書によってやがて来られる救い主について伝えられていたけれども、多くのユダヤ人は受け入れませんでした。救い主である方に信頼して従おうとする人々には、救いが与えられるのです。

また、名はその名によって思い起こされるすべてのこと指します。キリストの名を信じるとは、キリストについて教えられていること、約束されていることのすべてを受け止め、信頼するということです。

そして、「この方を受け入れた人々」は、直訳すると「この方を受け入れたすべての人々」となります。

ですから、キリストについてみことばによって語られているすべてを受け止め、キリストに信頼して従おうとする人は誰でも、どの民族でも、どのような生き方をしてきた人でも、与えられるのです。

その人々に与えられるのは、「神の子どもとなる特権」です。イエス・キリストは神の御子であり、神です。その御子イエスを信じる人々も神の子どもとなることができますのです。信じる人々は、神になるものではありませんが、神の子どもとしての立場が与えられます。言うなれば、養子とされるということです。養子であっても、実子と同じ権利を持ちますから、これは実に大きな特権でしょう。これがどんなにすばらしい特権であるか、聖書からいくつかのことが分かります。

神の子どもとなった者は、神を天の父とお呼びして、親しく神に祈ることができます。その者には、天の父はご自身のみこころを明らかに示してくださいます。天の父はその者たち一人一人を守り、それぞれに最善のものを与えてくださいます。そして、神の子どもは、天の父の栄光の富、永遠の御国を御子イエスと共に相続することができます。

13 節。イエス・キリストを信じることは人の主体的な決断によります。しかし、それと同時に、その人は「神によって生まれたのである」と言われます。神によって新しく生まれたので、イエス・キリストを信じるのできるのです。

神の子どもとなった人々は、「血によって」そうなったわけではありません。アブラハムの子孫だからとか、敬虔な信仰者の血筋だからではありません。また、「肉の望むところ」でもありません。その人の努力とか修行の結果、神の子どもになるのでもありません。また、「人の意志によって」でもありません。自分や他の人の願いや意志の強さによって神の子どもになれるのでもありません。ただ神の働きだけが、人を新しく生まれさせ、神の子どもとすることができるのです。救いは神の御業、神の奇蹟なのです。

ですから、イエス・キリストを信じることと神によって生まれることとは、決して分けられないことであり、表裏一体のことです。私たちがイエス・キリストを信じ、キリストを主として自分を任せた時、たとえそれが弱々しい決断であったとしても、確かに神によって新しく生まれさせていただいたのです。生まれたばかりですから、自覚がなかったかもしれませんが、信仰があるところには、必ず新しく生まれることがあるのです。

イエス・キリストを信じ、受け入れるなら、誰でも、神の子どもとなる特権を与えられます。このみことばを心に留めましょう。

救いをいただいている方々は、神によって新しいいのちに生まれたことを感謝しましょう。さらに、神の子どもとしての特権や幸いを知らせていただきましょう。

これまでイエス・キリストを信じる信仰を言い表しておられなかった方々も、あなたを光で照らし、救いを与え、神の子どもとしてくださる救い主イエスを信じ、告白しましょう。